

ぼくはプーポ

ももじま そふいあ

ハッと目を開けると、黒い夜空にぽっかり  
浮かんだ満月が、不思議そうにぼくを見下ろ  
していた。どうやらぼくは、ひんやりと冷た  
い草むらに転がっているようだ。あたりを見  
回しても、だれもいない。ジンジンと体のあ  
ちこちが痛むのはどうしてだろう？それより  
なにより、一体、どうしてぼくはここに  
いるんだろう？えーと：ぼくはたしか：あれれ？  
おかしいぞ？なにも思い出せないなんて！  
ホウ、ホウ、と遠くで何かが鳴いている。  
ホウ、ホウ、ホウ、ホウ：夢をみているの  
だろうか？暗やみを見つめるぼくの目の奥に、  
ふと、だれかの気配が残っている気がした。  
『プーポ！』：？ぼくを呼ぶ、だれかの声：？  
『プーポ！』：そうだ！ぼくの名前は、プーポ。  
そしてあの声、フワッと温かくぼくを包むよ  
うなあの感覚：だれだろうか？ああ、わからな

い！確かに知っているはずなのに、それ以上  
なにも思い出せない！

なぜ？一体、ぼくに何が起こったんだ？

暗闇を見つめていると、急にガサガサッと  
音がして、二つの黄色い光が現れた。その光  
がパツと近づいて来たかと思うと、ズキッ！

「いてっ！」

ぼくの肩に鋭い痛みが走った！

「ギユッ！」

同時に変な叫び声も聞こえた。

「なんちゆう固いチーズだ！ 歯が折れるか  
と思ったギユ！」

「はあ？：チーズだった？」

見ると、大きな灰色ネズミが、とがった前  
歯を両手でおさえ、足をバタつかせていた。

「あの、ぼくチーズじゃないと思いますか：」  
肩をさすりながら言うと、

「ギユギユ！なんだと？クリーム色で穴ポコ  
だらけのお前は どう見てもチーズだギユ！丸  
っこくて三角で、三角だけど丸っこい、それ

はやっぱりチーズだギユ！ちよっぴり固くな  
った、古い食べかけチーズだギユ！」

なんだって？失礼な！ぼくがムツとすると、  
ネズミはまたもや勢いよく飛びかかってき  
た！ぼくはとっさにコロリと転がって、ネズ  
ミの攻撃をかわした。

「だから、ぼくはチーズじゃないってば！」  
「ギユギユ！それじゃあ、お前は一体なにも  
のなんだギユ？」

ネズミは疑わしそうにぼくを見た。  
「それが：ぼくも、なにがなんだかわからな  
くて：とても困っているんだよ：」

ぼくがため息をつくとき、ネズミは、ぼくの  
周りをウロチョロ、ジロジロと観察し始めた。

「ギユギユ、お前の体、ヒビが入って、角  
がわれてて：穴がいっぱいあいてるギユ」  
ネズミは前足でぼくの体中をピタピタとさ  
わったあと、また口を開けて前歯を突き出し  
た。ガツン！

「ギユツ！やっぱり固すぎる！」

「いたいってば！」

「わかったギユ！おまえはチーズの石像だギユ！大獵を願うお守りの彫刻、チーズの芸術作品！太古の遺跡、お宝発見！早速、ネズミ王の宮殿に運ぶんだギユ！」

ネズミが大声でそう叫ぶと、突然どこからともなくゾロゾロゾロと仲間のネズミ群団が現れた！キラキラ光る黄色い無数の目が向かってくる！ネズミ王の宮殿に運ぶ？冗談じゃない！ぼくは慌てて転がり逃げた。

「まてー！それ、お宝チーズをつかまえろー」  
コロコロコロコロ：コロコロコロコロ：

ぼくは一生懸命に丘を転がり、砂利道を転がり、土手を転がり、とうとう勢い余って川の中にポツチャン！と落ちてしまった。

プクプクプクプク：ポコポコポコポコ：  
ネズミの言っていた、ぼくの体の小さな穴から空気が抜け出ているらしかった。岸辺でギユウギユウとさわぐネズミたちの姿が見えなくなつて、ぼくは少しホツとした。

「ああ、おそろしかった！それにしても、ぼくがチーズの石像だなんて！？あのネズミ、よっぱどおなががすいていたのかな！」

そう言えば、ネズミは、ぼくの角っこが割れてると言っていたな：もしかしたら、そのせいで、ぼくの記憶が抜け落ちてしまったのかも知れないぞ。

「あーあ。一体どうしたらいいんだろう：？」  
ぼくは川の流れて揺られているうちに、疲れたせいか、ウトウトと眠りこんでしまった。

『プーポ！』

だれかがぼくを呼んでいる。光がまぶしくて、よく顔が見えないけれど、この声は：

『プーポ、今日は何を練習しようか？』

鈴の音みたいに軽やかで楽し気な声：ぼくの知っている声、心に気持ち良く響く声：

『きらきら星、かっこう、大きな古時計：』

小さな手がぼくを包む。温かく、優しくぼくを包み込む：ぼくは、うれしくて胸がワクワク

ワクする。

『じゃあ、まずはこれから！せえくの！』

「はっ：！」

目を覚ますと、ぼくは白い砂の上に横たわっていた。ずいぶん流されて、海の底まで来たらしい。ぼくのとおりで、海藻がユラユラと音もなくゆれている。

「ぼく、夢を見ていたのか：」

夢の中で、またあの声を聞いた：そして、温かい小さな手のひら。ぼくと一緒になにかをしようとしていた：ああ、とてもなつかしいような、胸がしめつけられるような：。でも、それより先は、濃く白い霧の中に吸い込まれてしまったかのように、記憶がとぎれてしまっているんだ：。

海の底は、シーンと静まり返っていた。

時々、大小さまざま、色とりどりの魚たちが、ぼくの横をスイスイ通り過ぎていく。そのうち小さな魚の群れが、ぼくのそばへやってきた。

「これはこれは、めずらしい貝ガラもあったもんだ。私たちの隠れ家にぴったりじゃないか。中が空洞になっているし、卵を産むのもちようどいい広さ。ほら、この穴から出入りすれば、大魚につかまることもなさそうだ」  
群れのリーダーらしき魚が、すうっと穴を通って、ぼくの体の中に入ってきた。

「アハハッ！くすぐったい！」

ぼくは思わず大声で笑ってしまった。

「あわわっ！貝ガラがしゃべったぞ！」

魚たちは慌てた様子で外に飛び出し、キュッと一つのかたまりになると、いつせいにぼくの方に向き直った。全員が全員、目をパツチリ、口をパツクリ、まるでお化けを見たかのように固まっている！

「あ、ごめんなさい。驚かせるつもりはなかったんです。ぼく、プーポっていいいます。実は、ぼく、困っているんです。自分のことを、名前しか思い出せなくて……。頭を打って、記憶がなくなっちゃったみたいなんです」

魚たちはザワツと体をゆらし、お互いに顔を突き合わせた。

「それはお気の毒に。私たちのわかるのは：あなたの体の中は空洞で、とても広々としているってことです。すっかり海水に浸かっています。フニヤフニヤにふやけたりはしていません。こうして海の底にきちんと沈んでいるわけですから、貝ガラでなければ、サンゴの仲間かも知れませんかええ：」

「サンゴの仲間：？」  
「ええ、ここから少し離れた所ですが、サンゴのコンサートホールがありましたね。海の音楽専用の立派なホールなんですよ。あなたは、それにちよっぴり似ているかな、と」

海の中にそんな施設があるなんて、初耳だ。

「へえ、サンゴのコンサートホール：海の音楽：？なんだか興味深いなあ！」

「音楽」と聞いたとき、ぼくの心にパツと明かりが灯ったように感じたのはなぜだろう？

「ハハ、ええ、まあ。その、海底の音楽とい



うのは、実にささやかでデリケートなものでして。プクプク泡の上昇や、海藻のゆらめき、微生物のダンス、光と風が生み出す波の偶発：いわゆる一種の音楽的イメージーションを楽しむもの、とでも言いますか：」

魚はウツトリと目を閉じて、音楽会の思い出にひたっているようだ。けれど、ぼくは、海にもぐるなんて初めてののような気がする。海水の塩分がピリピリと体を刺激するのも、全く身に覚えがない感覚なんだ：。

「まあま、プーポさん。焦らずゆっくり、ね。ここで出会ったのもなにかの縁。きっと私たちにも、なにか手伝えることがあるはずですよ。魚はヒレでポンポン、とはげましてくれました。」「そうですね：ありがとう。では、ぼくにも、なにか手伝えることはありませんか？」

「ふむ：。プーポさん、私たちは卵を産む場所を探しているのです。あなたの体の空洞は、理想的な形をしています。どうか、私たちの卵を、ここで守らせていただけませんか」

「わかりました。ぼく、これから予定もないし、この中で良かったら、どうぞ卵を産んで育ててください。生まれたての魚の赤ちゃんが見られるなんて、ぼくも楽しみだなあ」

こうして、ぼくは、静かな静かな海の底で、小さなかわいい稚魚たちを見守って暮らした。ご近所の魚たちみんなとも仲良くなり、和やかな毎日を過ごした。けれども、海の底は、あまりにも静か過ぎて、ぼくはだんだん音が恋しくなってきた。あの真つ暗闇の中で聞いた、ホウ、ホウ、という鳴き声や、ギユウギユウうるさい灰色ネズミの声さえも、たまらなくなつかしく思い出すようになったほどだ。そして、あの鈴のように朗らかな声：夢の中で、何度あの声を聞いたことだろう…。やがて、稚魚たちが成長して立派に巣立っていったとき、ぼくは、とうとう心を決めた。「よし、ぼくはもう一度、陸地に戻ってみよう。そして、もう少し旅を続けていけば、もつとなにかが分かるかもしれない」

ぼくは、魚さんたちに別れを告げ、果てしない海底を進み始めた。しばらく行くと、海藻のかげから、赤いガリガリ甲羅のカニが、シヤカシヤカ、シヤカシヤカシヤカ：と横歩きしてきたので、声をかけてみることにした。

「あのう：ちよつとすみません」

「うわっ！」

カニはギョツとしたように目玉をまんまるに見開いて、ジャキツとハサミを構えた。

「あっ、おどろかせちゃってごめんなさい。

実は、ぼく、これから陸地に上がろうと：」

「お、おまえ、一体なものだ？：その形！

ま、まさか： UFOじゃないだろうな？」

カニは両手のハサミを高々と持ち上げて、戦闘態勢を決め込んでいる。ぼくは思わず笑い出しそうになった。

「あの、ぼく、あやしいものではありません。

ユーフォ、ではなくて、プーポです。」

「ププ、プーポお？：新種の UFO か？」

「いえ、あの：ぼくは記憶をなくしてしまっ  
たみたいで、自分のことがわからなくて、今  
とても困っているんです」

「なんだって？そりゃあきつと、UFOに連れ  
去られて記憶を消されちゃったんじゃない？」

「：あの、ユーフォー、ってなんですか？」

「UFOも忘れてしまったとは：やっぱり奴ら  
のしわざに違いねえ：いやしかし、名前以外  
わからないとなると、お前さんは、これから  
どこで何をして生きていけばいいのか、まる  
っきりわからない、ってことなんだな？」

ぼくは、ちよつとびっくりした。カニさん  
は、思ったよりも、話がわかりそうだ。

「その通りです。ぼく、陸地から川に落ちて  
流されて、今まで海の底で魚たちの家になっ  
ていたんです。静かな海底で、ずっと動かず、  
音のない毎日を過ごしていたら、音が恋しく  
て、恋しくてたまらなくなってきました：。それ  
で、陸地に戻る方法を考えていたんです。そ  
こにちようどカニさんが通りかかって：」

「そうかい、そうかい。よくわかったよ。それならオイラが砂浜まで案内しよう。ちよつと遠いが、まあゆつくり行こうじゃないか」  
「わあ、よかった！ カニさん、ご親切にありがとうございます」

ぼくらは、やわらかい海底の砂の上を一緒に歩き出した。

「しかし、なんだ、自分のことがわからないってのは。ずいぶんマヌケだが：今、おまえさんは、自由なんだな。きつと、だれよりも」

「えっ？ どうして？」

「たとえば、オイラはカニだ。カニには、カニの責任というものがある。カニらしくハサミをチヨキチヨキしながら横歩きして、穴の中に住んで、ときたまブクブクと泡を吹いたりして、常にカニらしくふるまわなくちゃならない。もしもエイのようにおなかを下にしてヒラ泳ぎしたり、トビウオみたいに海面ジャンプばかりしていたら、すぐにカニ交番に連れていかれて説教を食らうし、仲間にもきら

われちまう。だけど、今、お前さんの周りには、そんなことを言う輩はいないだろう？だれにも気兼ねなく、好きなことができるってもんさ！ワクワクしてくるじゃあないか！」

「ふうん、そうか：ぼくは自由なのか：。だれにも気兼ねなく好きなことができる、かあ」

「そうさ。これからクジラ探しの冒険に出ることだってできるし、船底にはりついて、世界一周旅行だって夢じゃない！うまくいけば、飛行機に乗り換えて、次はロケットに、そしてついには UFO：！ん？待てよ：むむ、そう考えると、オイラはカニだが、これから先、カニが何億年とこのままカニでい続けるかどうかなんて、だれにもわかりやあしない。今、我々が、まだ完成していない進化の途中だと考えるならば、オイラだってもしかしたら：」

カニさんは、なにやら急に真剣な表情になって、ブツブツひとりごとをつぶやいている。

自由：なんでもできる自由。ぼくは、今からどこへ行ってもいいし、なんでもできる：

自由って、なんだかワクワクするし、とつても面白そうだ。：だけど、ぼくには今、どうしても気になることがある：『プーポ！』ぼくを呼ぶあの声だ：まるで、ぼくと世界を結ぶたった一本の糸みたいに、失いたくない、とても大切なもののような気がするんだ：。「さつき、お前は『音が恋しい』と言っていたらう？きつと、お前は以前、きれいな音に囲まれて生きていたのかもな。そうでなきゃ、そんなに音を恋しく感じるはずがない。陸地に着いたら、お前の心に響いてくる音をたどっていけば、何かわかるんじゃないのかね？」カニさんはぼくの目をじつと覗き込んだ。「なるほど！そうだね、音か：。ぼく、なぜか音を聞くと、心が騒ぎ始めるんだもんな：」カニさんのおかげで、なんだか勇気が湧いてきた。陸に向かって歩き続けるうちに、辺りが少しずつ明るくなってきていた。頭のずつと上の方に、光を浴びてユラユラと揺れる海面が見える。もう少しだ！

「ありがとう、カニさん。じゃあ、ぼく、ここからは、一人で行けると思いますが」

「おお！プーポ、そうか、行くんだな。では、オイラも冒険の旅に出るとしよう。せっかくプーポと知り合えたんだ、覚悟を決めるさ。では、きつとまた会おう。小さな友、プーポ」

キリリ、と勇ましい表情でそう言うと、カニさんはフワリ、フワリと海水にゆられながら、来た道とは別の方へ向かって行った。

『小さな友、プーポ』：初めてもらったプレゼントみたいに、ぼくはカニさんの言葉を、何回も胸の中でくり返した。

ザザーン、ザザザーン：海面の波の音が徐々に大きくなり、ぼくはやがて海から砂浜へ上がった。ああ、目がくらみそうだ！雲一つない真っ青な空が、ぼくを待っていた！「ぷはあく！ああ、空気っておいしいなあ！それに、とってもいい匂い！」

重い海水にぬれた体を、温かい潮風が優しくなでていく。空気を切り裂き飛び交うカモ



メや海ガラスの、キイキイ、ギヤアギヤアという鳴き声の騒々しさがこんなに頼もしく感じられるなんて！ポー、ポッポオー、という遠くの船の汽笛にも、ぼくの胸は喜びに高鳴った。ぼくの周りに、音の世界が戻ってきた！

「ああ、太陽がまぶしいな！ああ、温かい！」  
砂浜に寝そべって日向ぼっこを楽しんでいると、ザザザアーツと大きな波を立てながら強い潮風がやってきて、ぼくの身体を通り抜けた。すると、ぼくの体がフウー、フウー、ホオー、ホオーと鳴りひびいた。

「あれ：この音：？」

急に、心が締め付けられるような、それなのに心が張り裂けそうな、はげしい喜びと痛みとが、ぼくをおそった。知ってるよ！この音：ぼくは潮風を待った。もう一度、今すぐに、あの音を聞きたい！期待と不安にギュツと絞り出されたみたいに、目に涙が浮かんだ。

もう少しで、なにかを思い出せるような気がする。潮風よ、早くぼくのところに来てく



『りり子！早く宿題を終わらせて、ピアノの練習をきなさい』

お母さんの声が聞こえると、りりちゃんは『はいはい、わかってます！はあ：あゝあ：。プーポ、あとで遊ぼうね！』

お母さんに返事をしたあと、りりちゃんはぼくにウインクした。りりちゃんはテキパキと教本を準備してピアノの前のいすに座り、姿勢を整えた。鍵盤の上に両手をふわりと広げ、肩を落とし、アゴを引いて：そして、りりちゃんは大きく息を吸い込み、弾き始める。

『今度のコンクールも頑張って、りりちゃん』  
ぼくはピアノの上で、りりちゃんを応援する。時には軽やかに、時には力強く、時に悲しく、時に激しく：心をゆさぶる演奏に耳を傾け、細く白い指の運びを見守る：。

と、なにか大きなものが、ぼくの視界をさえぎった。

『むわっ！』

太ったモコモコ猫の太いしっぽが、ぼくにおおいかぶさってきた！まったく、この猫ときたら、いつだってぼくとりりちゃんの間に入ってくるんだから！おまけに、モコモコ毛がぼくの穴に入り込んで：

『ふあつくしよんっ！』

『あっ、モコ！だめよ、ピアノの上に乗っちゃや！いつも言ってるじゃないの』

りりちゃんが立ち上がって、モコモコをおろそうとした、その時！

ブワンッ！ビシッ！

『うわあっ！』

一瞬、なにが起こったのかわからなかった。

ガツン！パリン！カッシャーン！

『あいたたたた！』

『あっ、プーポ！』

りりちゃんの叫ぶ声が聞こえた。モコモコのしっぽのせいで、ぼくはピアノから落ち、花瓶に当たってはねかえり、床に落ちて割れてしまったんだ！

『プーポ！ああ：欠けちゃってる！プーポ、大丈夫？』

りりちゃんがあわててぼくを抱き上げた。

と、そのとき、

『あっ：いたっ：』

りりちゃんが、急に顔をしかめた。

『りり子？なにやってるの？まあっ！指が！

早く、早くそれを放しなさい！』

お母さんが真っ青な顔をして駆け寄ってきた。ポタツ、となにかがぼくの上に着てきた：血だ！りりちゃんの指から血が出てる！

『りり子、病院へ行くわよ！急ぎなさい！』

ああ、どうしよう！りりちゃん、大丈夫？

ぼく、りりちゃんを怪我させてしまった！し

かも、大切な、大切な指を：りりちゃん、り

りりちゃん、大丈夫？りりちゃん：ごめんよ、

りりちゃん、大丈夫？：

「りりちゃん！」

ハッ：！自分の叫び声に驚いて、ぼくは目を覚ました。昇り始めたばかりの朝日が、静

かにぼくを照らしていた。そうだ、りりちゃん：あの声、あの手の平：りりちゃんだ！

思い出した、なにかも：！

あのあと、りりちゃんがお母さんと病院へ行ってしまおうと、モコ猫はジロリ、とぼくをにらみつけ、ゆっくりと近づいてきた。

「お前、よくもやってくれたな！りりちゃん  
の大切な指になんてことを：！」

大きな目をグワツと見開いて、ぼくを見下ろすようにせまってきた。

「わざとじゃないんだよ！ぼくだって、りりちゃんを傷つける気なんてなかった：」

お前のしつぽがぼくをピアノから落っことしたんじゃないか：そう思ったけれど、こわくて言えなかった。それよりもなによりも、ぼくの心は悲しみでいっぱいだった。りりちゃん、大丈夫だろうか、指は元通りに治るんだろうか、ピアノはひけるんだろうか：。

モコ猫は、乱暴にぼくをくわえ、外へ出た。

そして、縄張りの一番はじっこまで来ると、

草むらの上にぼくをポトリ、と落としました。

「お前は、もう二度と帰ってこなくていいんだからな！」

そう言うのと、モコ猫は、太い前足をヒョイツと横に持ち上げた。イヤな予感がしたけれど、ぼくにはどうすることもできなかつた。

ぼくは覚悟を決め、固く目をつむった。

ブウン！と音がしたかと思うと、ボカン！体にもものすごい衝撃がはしり、ぼくは宙を飛んでいた！まるでゴルフボールみたいにもものすごいスピードで、うんと遠くへ飛ばされ！そして、そのまま、ぼくは気を失った！目覚めた時は、真っ暗闇の草原にたおれていた！。

ああ、なんとということだ！こんなこと、思い出さなければよかった！ああ、りりちゃん：どうしているだろう？指が痛くて泣いているだろうか、ピアノが弾けなくてくやし涙を流しているだろうか：コンクールはどうなつたんだらう？あの細長い白い指は、きれいに

治るんだらうか？ああ、ぼくは、これから、  
一体どうすればいいんだ？

ぼくは大ばか者だ！あの時、カニさんの言  
う通り、クジラ探しの冒険に出て、クジラと  
友達になればよかったんだ！船底にくっつい  
て世界一周すればよかったんだ！

ノコノコと陸地に戻ってきて、りりちゃん  
を傷つけたことを思い出し、それなのに、ど  
うすることもできないなんて！どこへ行って、  
何をすればいいのか、前よりももつともつと  
わからなくなってしまったじゃないか！

風が強くなってきた。ぼくの体の穴を通る  
風がうなる。まるでライオンのように吠え始  
める。ブオオー、ブオオオー、ゴオオー、ゴ  
オオー！ぼくは、泣いた。どうしようもな  
く悲しくて、ライオンのような大声で、潮風  
を浴びながら泣き続けた。

「プーポ」

ああ、ぼくを呼ぶ、あの鈴のような、りり  
ちゃんの軽やかで愛らしい声：



「プーポ！」

もう二度と聞くことはできないのか：

「プーポ！」

りりちゃんの声が、心の中で何度も何度もこだまする。ごめんよ、りりちゃん、ぼくのせいで：りりちゃん：りりちゃん：

「プーポ！」

大ばか者のぼくは、これから一体どうすればいいんだろう：？

「プーポったら！　プーポでしょ？」

「：えっ？」

びっくりして振り返ると、目の前に女の子が立っていた。フワフワの茶色い髪が軽やかに潮風に舞っている。意志の強そうな澄んだ黒い瞳がぼくを見つめ：て：

「り、りり、りりりりり：！」

「プーポ！　やっぱりプーポね！　わたしの宝物、オカリナのプーポ！」

「りりちゃん！」

信じられない！　りりちゃんが目の前にい

る！そして、ぼくを見ているよ！あの素敵な  
笑顔で：ぼくを宝物だって：オカリナのプー  
ポって：おかりな？　：オカリナ：

そうだ！ぼくは、オカリナのプーポだ！

「うわーん！」

涙でなにもかもがぼやけて見えなくなっ  
ちやっただよ！りりちゃんはぼくを両手でそっと  
持ち上げ、優しく胸に抱いてくれた。

「りりちゃん、ごめんね！ぼくは：」

「プーポ、心配かけてごめんね。指はもう大  
丈夫。あれはプーポのせいじゃないのよ。そ  
れに、実はわたしね、あの時に指を怪我して、  
本当に良かった、って今では思っているの：」  
「えっ？どうして：？」

「わたし、本当は、ピアノをやめたかったの。  
だけど、お母さんが先生だから、ずっと言い  
出せなくて：。コンクールの練習のためだけ  
に、何時間も何時間も練習するのがいやでい  
やでたまらなかつた：このままだと、ピアノ  
をきらいになりそうで悲しかった。わたし、

プーポと一緒に、好きな音楽を自由に奏でている時が一番楽しくて、しあわせだったの……。だから、病院から帰ってきて、プーポがいなくなってしまうたとき分かったとき：「

りりちゃんは、ふうつとため息をついた。ぼくを見つげるために、家の中も庭も、周辺の道や公園も探したけれど、ぼくは見つからなかったって：それも、当然だ。そのころ、ぼくはネズミの大群に追われ、川を漂い、海の底で魚と一緒に生活していたんだからね！「割れたまま、一人ぼっちでどこかで泣いているプーポを想うと、わたしの心も割れちゃいそうだった。そしてね、そのとき、本当のことを言わなきゃ、って強く思ったの。本当に心がこわれてしまう前に：」

そして、りりちゃんは勇気を出して、もうコンクールには出ない、とお母さんに告げた。お母さんは、始めは悲しそうな表情をしていたけれど、りりちゃんの意志の固さを、その瞳の中に感じ取ったのだろう。お母さんは、

「りりちゃんには、息抜きが必要なのね：」  
と言つて、海辺に住むおばあちゃんの家  
遊びに行くようにすすめた。久しぶりにり  
ちゃんに会つたおばあちゃんは、その浮かな  
い表情を見ると、こう言つたそうだ。

「気持ちの整理をするには、うんと早起し  
てね、海に行くのが一番なのよ。空と海と風  
とひとつになつて、気のすむまで砂浜に座つ  
ていらっしやいな。もし、本当に、空と海と  
風とひとつになれたら、きつと、あなたにと  
つて大切ななにかが見つかるはずよ」

りりちゃんは、言われた通りに、朝早くか  
ら砂浜に座つて、まるで地球の一部になつた  
ように動かず、朝陽と風を浴びていた：。  
「そうしたら、どこかから、なつかしい音が  
聞こえてくるじゃない？ フォー、フォー、ホ  
オー、ホオー、つて。少し前とは違う気がし  
たけれど、わたしにとって、すごくなつかし  
い音が聞こえてきたの：。わたしはいてもた  
つてもいられなくなつて、音のする場所を突

き止めるために、砂浜を走って走って：そして、とうとう見つけたのよ！わたし、とうとう、プーポを見つけたの！」

「りりちゃん！」

すごい：！おばあちゃんの言ったことは、本当だったんだね！ああ、最高だ！ぼくの心の中にも今、大きな太陽が昇ってきたよ！

「さあ、プーポ、一緒に帰ろう。プーポの傷も、治さなくっちゃね！」

「あ：」

りりちゃんがそう言ってくれたけれど、ぼくには心配の種があつた。モコ猫のことだ。

「大丈夫だよ、プーポ。わたしにまかせて！いい考えがあるんだから！」

りりちゃんはパチツとウインクして、いたずらっ子みたいにニヤツ、と笑った。

ぼくは、オカリナのプーポ。今日も、りりちゃんの奏でる美しい曲を聴いている。でも、りりちゃんは、コンクールの練習をしている

んじゃない。

「わたし、自分で曲を創ることに決めたの！  
わたし、作曲家になるんだ！」

りりちゃんはそう言って、今は、なんと！

『オカリナ組曲 “プーポ” ぼくを思い出す  
旅』

なんていう壮大な音楽を作曲するって意気  
込んでいるんだ！そう、りりちゃんに再会す  
るまでの、ぼくの物語を音楽にするんだって  
：！だけど、あの海底のシーン、音のない場  
面を、一体どうやって表現するんだろう？  
：なんて、ぼくは余計な心配をしている。

ピアノの上で：ではなく、しっかりと編み  
込んだ組み紐をつけてもらったぼくは、ネッ  
クスミみたいに、りりちゃんの胸の上で。こ  
こなら、モコ猫に落とされる心配もないし、  
りりちゃんといつでも一緒にいられるんだ！

ぼくは今、最高にしあわせで、最高に自由  
を感じている。大好きな人と一緒に、これか  
ら、だれにもまねできない、自分たちだけの

冒険の旅に出るんだから！

「さあ、プーポ、始めるよ！」

りりちゃん元気な声が、ぼくの体に心地よくひびいてきた。

おわり